
夜行列車

広瀬もりの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜行列車

【著者名】

広瀬もりの

【あらすじ】

流れる窓灯りはやがて星になる 線路沿いの道を歩く帰り道、
思い出す「あなた」のこと。

サイト「夏色図鑑」に掲載中の短編です。

「この街にひとつしかないお風呂屋さんに行くのが、あなたの数少ない娯楽のひとつだつた。

洗面器に石鹼とシャンプーとお風呂スポンジを入れて。バスタオルとタオルを肩に掛けて。サンダルの音を響かせながら、夜道を歩く。夏は涼しいお散歩だつたけど、冬は部屋に帰り着く頃にはもう凍えていた。

カラーン、カラーン。

小さくなつたあなたの石鹼がケースの中で音を立てる。湯気の上がる指先。たくさんの星ぐずの中から、たくさんの星座を教えてくれた。

「神田川『ごっこ』… そんな風に言つていた。もちろん、私たちはリアルタイムでかぐや姫の「神田川」を聞いていない。でも、南こうせつさんがＴＶとかで唄つているのを聞いていて、あのもの悲しげなメロディーにノスタルジックな憧れを抱いていた。

貧しくて、贅沢なんて出来なくて。でも、ふたりで身体を寄せ合つていれば温かい。そんなままごとみたいな関係が、続けられるものなのだろうか。

「神田川のふたりは、… 結局別れたんだよね？」

いつだつたかゼミの友人がぽつんとそんな風に言つた。何やかんや言つても、私たちはまだ「恋愛」に対しても憧れを抱く年頃だつた。毎週、連ドラを觀ては、主人公がどうしたら幸せになれるかと気をもんで、ＴＶの前で一緒になつて泣いたりして。どんなに道のりが険しくても、それでもハッピーエンドになる結末が好きだつた。好きなのに、大好きなのに。どうして別れるのだろう。私には理解出来なかつた。相手のことが嫌いになつたなら分かる。人の心は変わつていくものだ。その変化に涙することもあるだつた。

… でも、愛情さえあれば。どんな山も乗り越えられる。そう信じ

てた。

あなたのバイトが終わるのを待つて出かけるので、いつでもお風呂屋さんの看板ギリギリだった。モップを持ったおじさんが磨りガラスの向こうに見えて、慌てたことも何度がある。大慌てで服を着て外に出た。息が白くなつて、その向こうであなたが笑つていた。線路沿いの道を歩くと、決まってそこを西に向かつて走つていく列車が通り過ぎた。在来線と少し色の違う車体。最初は何だろうと思つた。4人がけの座席に、乗客がまばらに座つていて。みんな眠つているみたいだつた。

それは、あなたの生まれた街に戻る夜行列車だと、いつか教えてくれた。東京を12時近くに出て、夜通し走る急行列車。寝台車ではなく、座席指定。座つたまんまで一晩過ごすのはかなり辛いと言つていた。過去に数回使つたことがあるみたいだつた。

窓の明かりは一本のラインになつて、遠く遠く流れしていく。カーブを曲がつて、カタカタと揺れながら、手に届かないところまで行つてしまつ。あなたの視線がそれをずっと追つていいくのが、何だか悲しくて、急にひとりぼっちになつた気がした。

上着の袖をぎゅっと掴むと、あなたが振り返る。そして、優しい笑顔で私を見た。

「…戻りたいの？」

泣きたい気分で、そう訊ねる。だつて、そうだよね。ふるさとに戻りたくない人はいない。それなのにあなたはもう何年も帰つてない。電車に乗つても飛行機でも、帰れる。新幹線だったら、ちょっとうたた寝していれば、到着するだろう。そんな距離なのに。

「ううん、戻らない」

そう言つて、あなたは私の肩を抱いた。

あなたの家は老舗の旅館をいくつも経営している資産家で、もちろんその運営はそれぞれの店がやるから、上に立つて管理するだけで、大金が転がり込む。そんな恵まれた実家を持っている人だつた。

だのに、跡継ぎの長男だったあなたは、その輝かしい未来への選ばれたレールを降りてしまった。

「映画監督になりたい」…この「デジタル・CGの時代にそんなことを言い出して、家を飛び出した。勘当という奴なんだという。働きながら、就職に有利な専門学校に通い、たまに撮影現場に転がり込んで、下つ端の仕事をしたりもしていた。

レンタルビデオ店のバイトで、私たちは知り合った。私は昼間のシフトで、あなたは夜のシフト。時給は安かつたけど、好きな映像の世界に触れていられるからいいと言っていた。顔を合わせているうちに何となく仲良くなり、その店が潰れてバイト仲間じゃなくなる頃、私たちはつきあい始めた。私はそのころ地元の大学に通っていた。

私の両親はアバウトだったから、娘がどこに泊まりに行つてもうるさく言わなかつた。そんなわけで、ちょくちょくあなたの部屋に入り浸り、そのたびに「神田川」と「こつこ」を楽しんでいた。

「神田川」のふたりは、それこそ爪に火をともすような生活をしていたのかも知れない。3畳一間の下宿なんて想像付かない。あなたの部屋は1DKでちゃんとキッチンもユニットバスも付いていた。それなのに「神田川」と「こつこ」をしたのは、趣味以外のなにものでもないのだ。

あなたの夢を隣で聞いている時間が楽しかつた。少し現実離れして危なつかしく見えるのは、苦労したことのない幼年時代を過ごしたせいなのかも知れない。浪費家ではなかつたが、僕約家でもなかつた。

でも…大丈夫。私たちは壊れたりしない。お互の間にちゃんと愛情があるんだから。どんなことにも負けない強い絆がある。そう信じていた。

暑い夏の日。

あなたは友達から借りたというハンディービデオを持って、私を

公園に連れ出した。そして蝉時雨の中に私を立たせて、一人きりの撮影会を行つた。

「…ほら、振り向いて。笑つて見せて」

安っぽいカメラマンみたいな台詞で、私に指示する。でも、私は上手に笑顔を作ることが出来なかつた。大きな麦わら帽子、白いワンピース…夏草の中で、日差しがまぶしかつた。でもそれよりもあなたの笑顔がまぶしくて…どうしても届かないもののように思えた。数時間の後。あなたは「いいものが撮れた」と笑つた。これを専用のケーブルで繋いでTVにセットすれば、すぐに再生出来る。でも、私はその映像を見ることはなかつた。

「ちょっと、行つてくるね」

そう言つて、白い建物の中に消えた。そして、あなたは二度と戻つてこなかつた。

スーパーの買い物袋を下げて、家路を急ぐ。

今日は1時間の残業があつたので、少し遅くなつた。とつぱりと日の暮れた風景に白い月が細く漂う。線路沿いの道を歩いていた。通勤列車が通り過ぎる。ぎゅうぎゅうのすし詰めの車内。でもその窓も遠ざかれば、あの日のよつに一本のラインになる。そして坂を上つて…何だか、銀河の中まで走つていきそうだ。

きつとあなたも乗つたのだ。あの、宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」のように、死者を乗せた汽車に。そして、今も宇宙のどこかを走つてゐるかも知れない。

治る病気じやなかつたんだという。もしも、もつと早い頃にきちんととした設備のある病院に入院すれば、それなりの延命措置は取つて貰えた。でも…あなたはそれを望まなかつた。

最後まで、人間らしく生きていきたい。そう言つていたのだとう。私は何も知らなかつた。あなたのご両親は何もかもを承知で、あなたの我が儘を聞いてくれたんだね。

入院した時。もう手の施しようがないほど、症状が進んでいたと

いつ。でも、あなたは最後まで気丈に頑張った。まさか、ベットに束縛されて3日で逝つてしまつとは思わなかつたけど。残された私は泣いて泣いて、もう全ての水分が身体から抜けてしまつほど、泣きまくつた。下を向くと、意識しなくとも涙が出てくる、そんな日常だつた。

…すぐに、そこに行けると思つたのに。

どうしたんだろうね、私はまだ生きてる。あなたの残したあの夏は一緒に棺に納めたけど、私はまだこうして生活してる。こんな私と幸せになりたいという人と巡り会つて、そして今、新しい命の誕生を心待ちにして過ごしてゐる。

彼は一番じやなくともいいよと言つてくれた。今この時を一緒に生きることが出来るなら…ただそれだけでいいからつて。そんなじや申し訳ないんだけど、でも…いいよね。

あなたと一緒に、あの列車に乗ることは出来なかつた。ふたりでどこまでも行こうと思つたのに、あなたは勝手に私を置いて行つてしまつた。そんな意地悪をするんだもん、少しくらい、困らせてもいいと思つ。待つていてね、全てが終わつたら、命の終わりに必ずそこに行くから。

あの夜行列車は、もう走つていない。時代の流れの中で時刻表から姿を消した。でも、私の心の中で、今も鮮やかに窓灯りのラインを描き、遠く星の間を抜けていく。あなたの辿つた夢と共に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0532u/>

夜行列車

2011年6月13日11時10分発行